

精神医療ミュージアム移動展示プロジェクト

——ワセダギャラリー（東京）と船場ビルディング（大阪）——

橋 本 明

昨年の『生涯発達研究』第7号に、“「精神医療ミュージアム移動展示プロジェクト—私宅監置と日本の精神医療史（2014年11月12日～14日、ソウル）」短報”という小文を掲載した。その後、類似の展示会を東京と大阪で開催した。以下はいわば昨年からの続編である。なお、記述は「近代日本精神医療史研究会」（<http://kenkyukaiblog.jugem.jp/>）のブログに筆者がアップした関連記事にもとづいている。

まず、2015年6月16日から同20日まで東京の早稲田大学構内にあるワセダギャラリーで開催された「私宅監置と日本の精神医療史」展を振り返りたい。ワセダギャラリーでの展示会は、ソウルでの展示会に早稲田大学の加藤茂生先生が来られたことが契機になっている。加藤先生から「この展示を早稲田でもやりませんか」との提案があったのである。

さて、ワセダギャラリーでの展示会開催前日の6月15日に展示物の搬入を行った。展示物とは、A1サイズの14枚の布ポスターとA4サイズの32枚の写真パネルである。この日の授業は休講にし、早朝に名古屋の自宅を出て、東京へ向かう。荷物を詰め込んだスーツケースは超ヘビー。名古屋市営地下鉄と新幹線はよかったが、東京メトロ東西線の早稲田駅の階段が最大の難所だった。この駅の高田馬場方面ホームで降りると、どんなルートをとどっても、階段を使わないと決して地上には出られない（車椅子用の補助装置はあるが）。

午前10時に会場へ。会場借用でお世話になっている上記の早稲田大学の加藤先生と、ワセダギャラリーの担当者の方と会う。簡単な打合せの後、名古屋から持ってきた展示物を加藤先生と二人で壁に貼る作業を開始した。美しく貼るには、

それなりの工夫が必要である。室内にあった不要な備品を移動したり、スポットライトの角度を調整したり、といった作業もあって、結局、準備作業に2時間半くらいかかった（写真1）。



写真1 ワセダギャラリーの入口

その日の夕方には名古屋にもどったが、加藤先生からメールが来て、その後、ギャラリーの担当者が会場を確認しに行ったところ、「両面テープで壁に貼った一部の写真パネルが落下している」ことが判明。壁のクロスと両面テープとの相性があまりよくないらしい。写真パネルに貼るテープの面積を増やして、補強してもらうことにした。

展示会は6月16日からだったが、18日までの3日間は愛知県立大学の授業があってギャラリーには行けない。その間は、加藤先生ゼミの学生・院生に展示会の「店番」をお願いした。律儀なことに、加藤先生はその日の状況を毎日メールで知らせてくれた。遠方にいてなにもできない身には嬉しかった。

授業がない6月19日と20日は、ギャラリーに行くことになっていた。両日とも「ギャラリートーク」の時間帯を設定した。最初は、見学者から展示に関する質問などがあれば、その場で答えるという、オンデマンド方式を考えていた。しかし、遠方から来訪する予定の人から、「説明の時間が決まっていたら、列車の時間を決めやすい」という意見もあり、急遽、1日3回のギャラリートークを実施することにした。11時半、13時半、15時半、でどうでしょう、とその人に問いかえすと、「11時半くらいなら到着できますね」ということで、11時半を最初の回にして、これらの時間帯に決定した。

実際、このような内容の展示については、ギャラリートークは効果的だと感じた。パネルに書かれた内容のごく限られているし、会場で配ったパンフレット（パネルの内容をさらに詳しく説明した冊子）を読むのは時間がかかる。見学者に向かって、パネルの作成者本人が説明するのが一番いい。

ギャラリートークをめざして集まってくれた見学者はさまざまだった。いわゆる精神医療・精神保健福祉の専門家もお見受けしたが、多くはそれ以外の人たちだった。筆者としては、学会や研究会や大学の授業の聴衆とは違う、しかも、ギャラリートークごとに異なる人たちの前で、結構緊張していた。ギャラリートークが終わった後も、そうした非・専門家の多くの人たちと個人的に話できたのは幸이었다。

記帳ノートに残された名前を数えると200人あまりで、地味な内容の展示にしては予想以上に多い数と認識している。わざわざ会場に足を運んでいただいた見学者の方々にこの場をかりて感謝すると同時に、早稲田大学の加藤茂生先生ならびに

加藤ゼミの学生の皆さんには、改めてお礼申し上げたい（写真2）。



写真2 ワセダギャラリーでのギャラリートーク
(2015年6月20日)

次は、2015年9月18日から20日まで大阪の船場で開催した展示会を振り返ってみたい。そもそも船場での展示会は、京都大学の新宮一成先生から「東京でやった展示会を、京都か大阪でもやりませんか」というオファーがあったことが発端になっている。京都だったら京大、大阪だったら船場ビルディングということだった。その時まで、船場がどこにあるのか、そもそも「せんば」と読むことさえ知らなかった（そういえば「船場吉兆」などという固有名詞も知ってはいたと、後に思い出したわけだが）。ネットで調べてみるとなかなか面白そうな場所である。京大も捨てがたかったが、結局大阪を選び、船場ビルディングの下見に行ったのが7月の終わりだった（写真3）。大阪での「私宅監置」展の会場となった同ビル3階にある「サロン・ドゥ・螺」および「京都大学新宮教室」を使って、下見時にはちょうど「心齋橋大丸 原図展 ヴォーリズと佐藤久勝」展が行われていた。心齋橋大丸は、ヴォーリズ建築事務所の設計により1933年に竣工した「百貨店建築の精華」で、文化遺産としての価値がとても高いという。だが、心齋橋大丸の建替え問題が浮上しており、このヴォーリズ展は建物の保存を訴える意図を持っているようだった。



写真3 大阪の船場ビルディング

さて、「私宅監置」展に話をもどしたい。船場での展示の準備は、楽といえば楽だった。すでに6月に東京のワセダギャラリーで展示したのと同じものを利用すればいいからである。ただ、展示会場で配る解説用のパンフレットの表紙（日程や場所が記載されている）を変更し、新たに250部を作成した。すべて手作業なので、一番手間がかかったのはこのパンフレットづくりである。

9月18日、展示会が始まる当日の朝に、重いスーツケースを2個転がしながら名古屋から大阪へ向かう。どの駅でも階段を使えないので、エレベーターを探しに探して、なんとか大阪市営地下鉄の淀屋橋駅の地上に這い上がる。そこから船場ビルディングまで、相変わらずスーツケースを2個あやつりながら、10分くらいで到着。午前10時ごろから、新宮先生や「サロン・ドゥ・螺」の人たちなどと展示の準備にとりかかる。

今回は、同じビルの3階とはいえ、ふたつの会場に分かれているので、「サロン・ドゥ・螺」には衝立を立てて、そこに写真パネルのみを貼り付けた。そこに収まらない写真パネルは、14枚の布製ポスターとともに、「新宮教室」に展示することにした。展示会は午後1時から始まるのだが、その15分くらい前になんとか準備を終えることができた。

今回は3日間という短期間の展示なので、筆者が会場の「店番」と展示の説明をすべて担当する

ことにしていた。が、会場がふたつに分かれており、準備や片付けを含めて、やはり一人ですべてをこなすには無理があった。とりわけ、展示会開催の直前をお願いした、準備、「店番」あるいは受付の要員の方々には、ずいぶん助けられた。

開催期間が短く、シルバー・ウィークと重なったこともあってか、大盛況とはいえないかもしれないが、ひとりひとりの来場者とゆっくり話ができただ点はよかったと思う。また、6月の東京の展示には行けなかったという、関西の友人・知人が来てくれたのは嬉しかった（写真4）。



写真4 来場者への説明

（船場ビルディング内の「新宮教室」にて）

ソウルでは当然だろうが、東京でも大阪でも、展示会の見学者と話しながら強く感じたことは、わが国の精神医療の歴史や現状は多くの人にとっては、ほとんど未知で謎めいた世界だということである。大学、学会、あるいは研究場面では当然のように話されている、かなり手垢が付いた「私宅監置」のような事象ですら、見学者からは「こんなの初めてです」と何度も聞いた。いかに自分が「井の中の蛙」的世界に生きているか、と改めて気づかされた。偏狭な「アカデミズム」の場面から少しズレながら、こうした展示会をやる意義は意外と小さくないようだ。

ところで、少し前のことだが、愛知県立大学の地域連携担当部局を通じて、全国でショッピング・モール／ショッピング・センターを展開している

某大手企業が、社会貢献事業の一環として商業施設内の展示スペースを無償で提供しており、そのための企画を募集しているというメールを受け取った。商業施設で「私宅監置と日本の精神医療史」展とはミスマッチもはなはだしいとは思ったが、誰でもその名を知っているだろう企業の対応ぶりを見てみたいという下心もあって、「こころの病と歴史」展というタイトルで応募してみることにした。その後、具体的な会場名（ショッピングセンターの展示会場）と展示の時期まで決まりかけた。よくもこんな展示会を引き受けてくれたものだと思っていたところ、どうやら先方は筆者の企画の内容を勘違いしていることがわかった。「うつ病の対処方法なんかをレクチャーしてもら

えるとありがたい」といったことを希望しているらしい。あくまで、「歴史」がメインだと強調したところ、結局、この展示会の企画は流れてしまった。さもありなん、である。

さて、精神医療ミュージアム移動展示プロジェクトはまだ続く。次の企画は、すでにほぼ決まっている。2016年の1月下旬から2月中旬にかけて、JR岡山駅近くの会場（「カイロス」2階の「精神資料室」、〒700-0022 岡山市北区岩田町5-7）を予定している（ただし、この『生涯発達研究』第8号が刊行されるころには、展示会は終了しているはずである）。